

令和 5（2023）年度 2 学期「学校評価」アンケート結果について（総括）

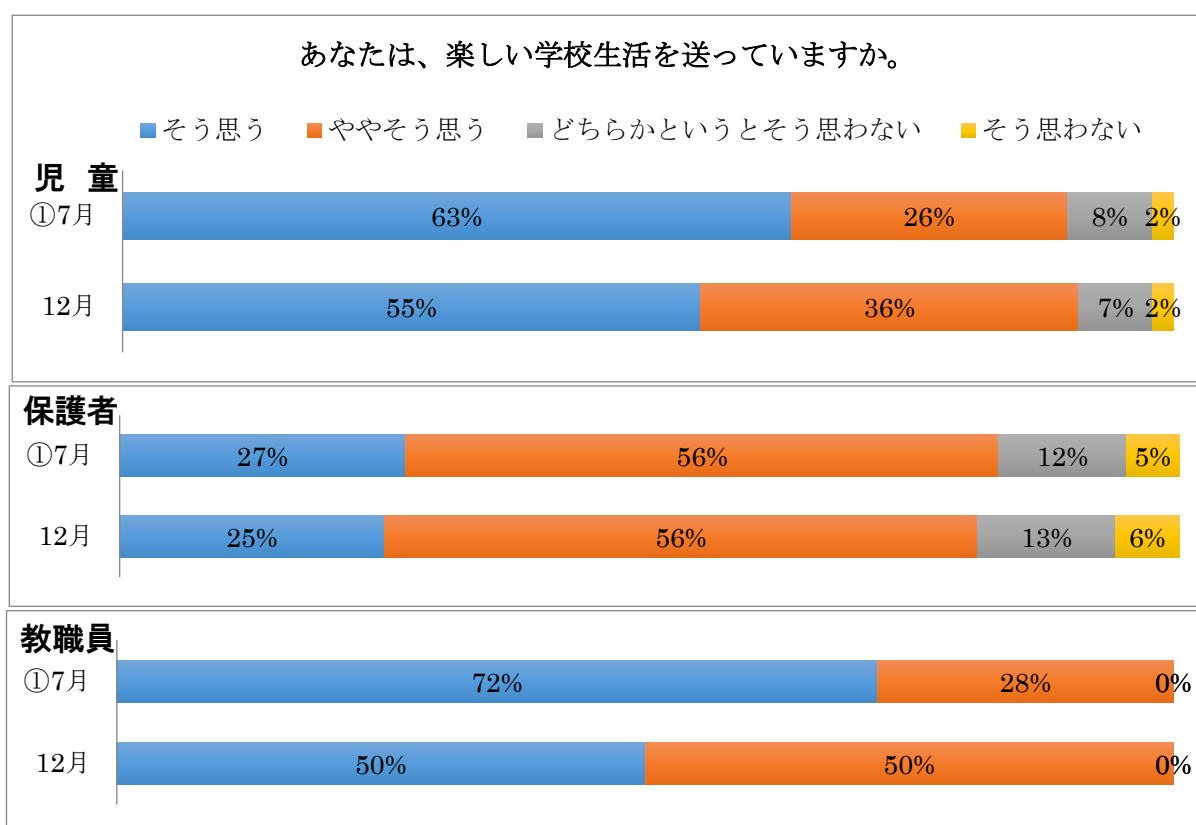
学校評価は、子どもたちがよりよい教育を享受できるよう、その教育活動等の成果を検証し、学校運営の改善と発展を目指すための取組である。1 学期末（7 月）と同様の内容で実施した。前回の結果と比較・検討するためにも同じ項目であることは有効であり、また、学校教育目標である「確かな学力」「豊かな人間性」「たくましい心身」が達成されたかどうかを検証する材料としても適切であると判断したためである。

全体の傾向をみると、各項目とも 7 月のアンケートに比べると肯定的な回答（そう思う、ややそう思う）は、児童・保護者・教職員ともに多少の増減はあるが、大きく変化はしていない。しかし、肯定的な回答のみをしてみると「そう思う」が減少し、「ややそう思う」が増加している。

各項目を分析・検討した結果を教職員に周知するとともに、学校だより等で保護者に知らせ、今後のよりよい学校づくりや、教職員の指導力向上に生かしていきたい。

アンケートは、児童用、保護者用、教職員用、いずれも 4 件法で実施

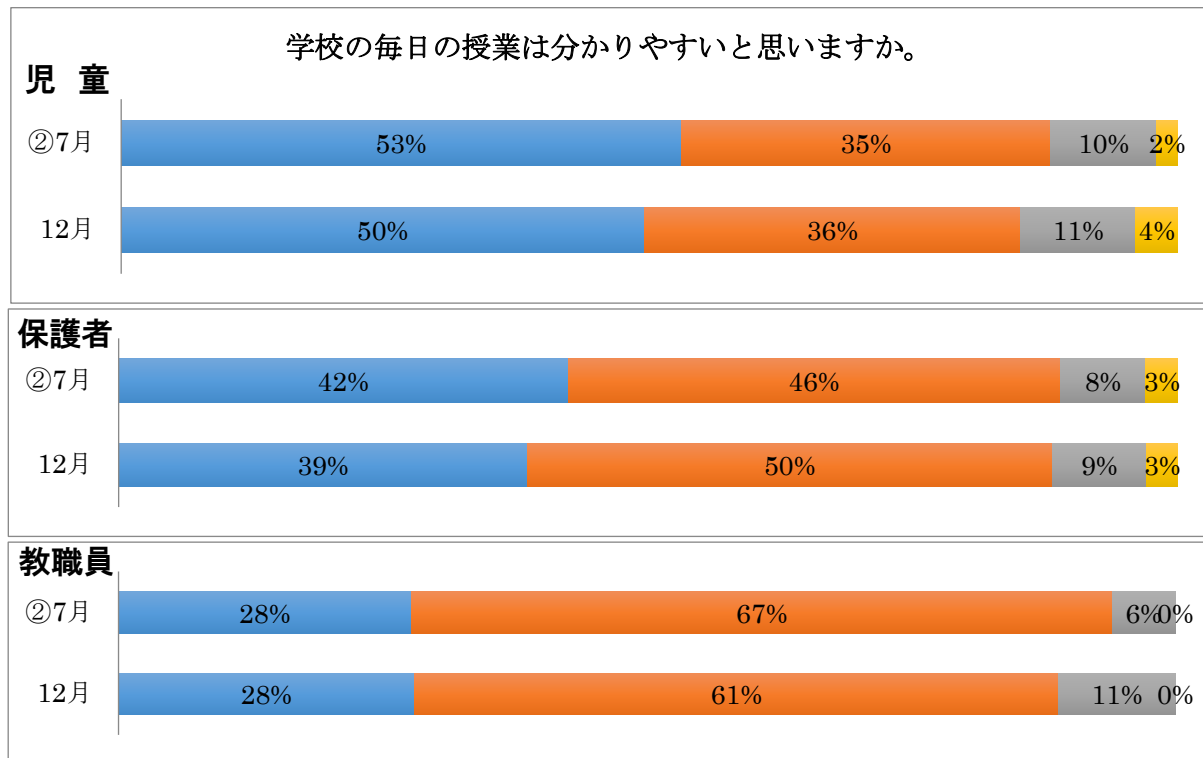
【設問 1】 「いじめや暴力のない楽しい学級・学校づくり」について



児童の肯定的な回答は、7 月 8 9 % に対し 1 2 月 9 1 % である。5 月以降制限のない学校生活で、校外学習等の行事だけでなく、日常の学習でも友だちと関わり交流する機会が増えたことも大きな一因と考えられる。また、保護者の回答は 8 3 % から 8 1 %，教職員は 2 回とも 1 0 0 % であった。

肯定的な回答のポイントは大きく変動していないが、児童と教職員の「そう思う」が減少し「ややそう思う」が増加していることについては考えていく必要がある。集団生活の中で様々な経験をする子どもの様子や友だち関係に注視していくことが大切である。学級や学校は、児童にとって安全な安心できる場であり、楽しく過ごせる場でなければならない。一人一人の気持ちの動きに気づき、真摯に寄り添うことを大切にして子ども達と向き合っていくことが必要である。今後も、人権教育・道徳教育や生徒指導の日々の積み重ねを意識し、児童の内面に迫る指導を行い、また集団に対する指導もきめ細かく行うことが、児童が明るい気持ちで登校し、安心して学習に取り組み、笑顔いっぱいに学校生活が過ごせることにつながる。児童の豊かな心を育ていけるよう、教職員は日々研鑽しなければならないと考えている。

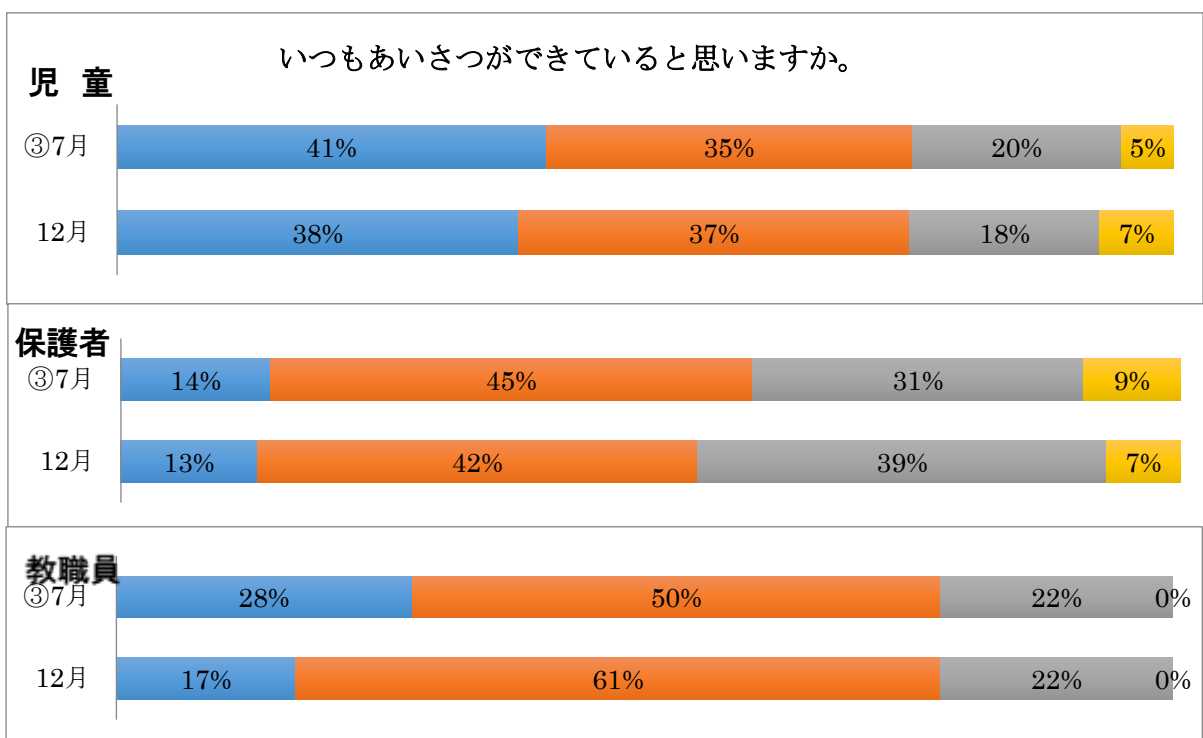
【設問２】 「授業のわかりやすさ」について



児童の肯定的な回答は、7月 88% に対し 12月 86%、保護者は 88% が 89%、教職員は 95% が 89% となっている。およそ 9 割の児童・保護者・教職員が肯定的な回答をしている。

今年度も、児童一人一人の基礎・基本のさらなる定着を目指し、「主体的に学び、考え、表現する子どもの育成」の実現を目指して取組を進めてきた。また、タブレット端末を使用し、児童の興味・関心を伴う授業の機会がより多くなっている。児童も、タブレット端末を活用しながら、他の児童と考えを交流し一緒に学ぶなど学習の幅が広がっている。学ぶことの楽しさが、さらに増してきたようである。しかし、授業で「何を考え、何がわかったのか」など日々の積み重ねを大切にしていけることが学力の定着・向上につながる。教職員は、児童一人一人の学習状況を注視し、児童により分かりやすい学習が提示できるよう教材研究に取り組み、ノートや教科書とタブレット端末の効果的な利用ができるようより一層力を入れていかなければならない。

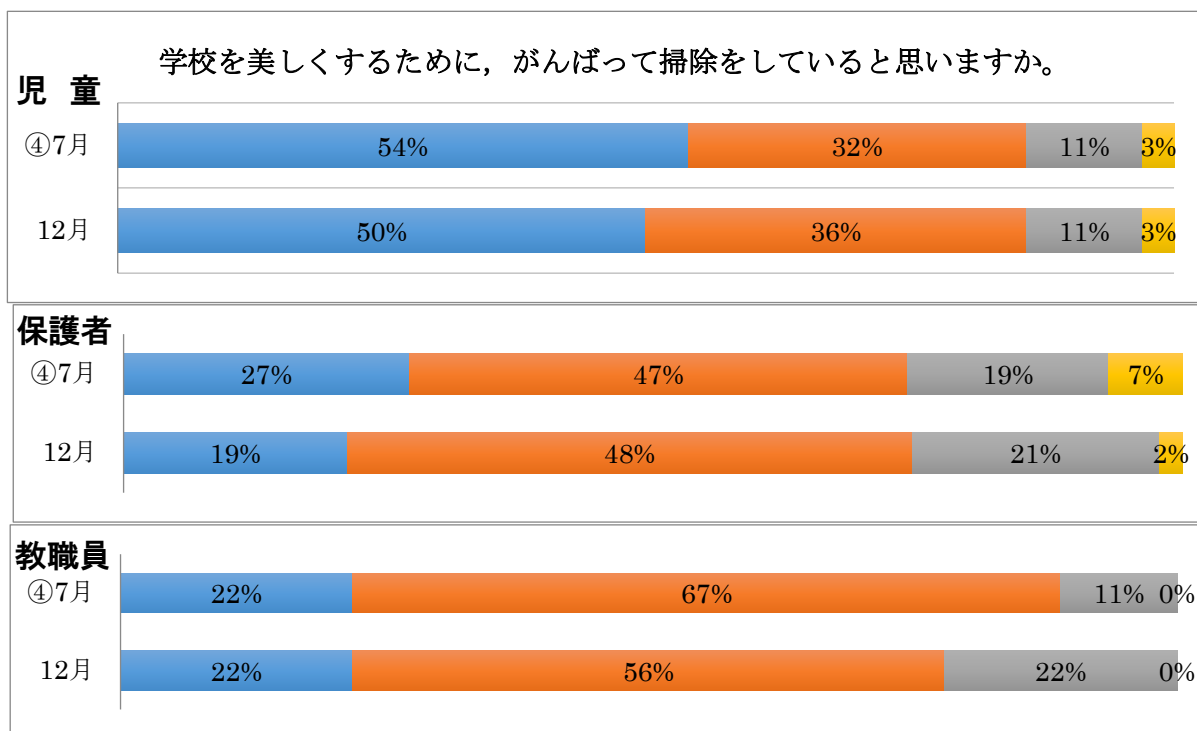
【設問３】 「あいさつ」について



今年度は、制限がなくなったこともあり、あいさつの大切さを声かけして指導している。しかし、児童の「あいさつをよくする」の肯定的評価は、過去３年間で、約７割とほぼ横ばいで、今年度も７６％、７５％と同様の結果である。保護者の評価も、６割前後である。教職員の評価は、７月は８９％となっていたが、７８％と減少している。「あいさつ」に関しては、肯定的な回答は低いと捉えている。校内で、あいさつを意識するだけではなく、登下校時の「あいさつ」や地域の方への「あいさつ」、返事などの受け答えなどに関して１学期から声かけをしてきている。しかし、子ども達が自然と挨拶をするところまでは習慣づいていない。今後は、「挨拶をしよう」と声かけするだけではなく、どのような場面で、どのような挨拶・返事や受け答えをするのかを具体的に示して行くことも重要である。加えて、子ども達の周囲にいる大人や教職員が見本となり示していくことも大切である。

あいさつは、よりよい人間関係を築くための第一歩であり、コミュニケーションづくりの基本である。誰もが当たり前、学校、家庭、地域のどの場でも笑顔で気持ちのよいあいさつができるような忍海小学校になるように取り組んでいきたい。

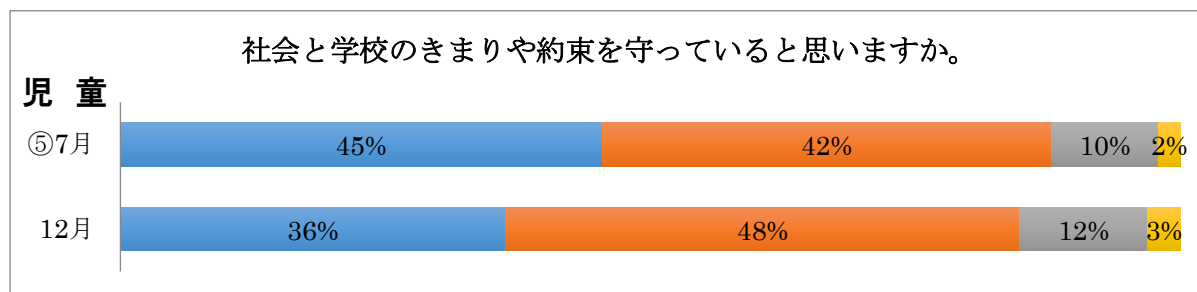
【設問４】 「校内の美化」について

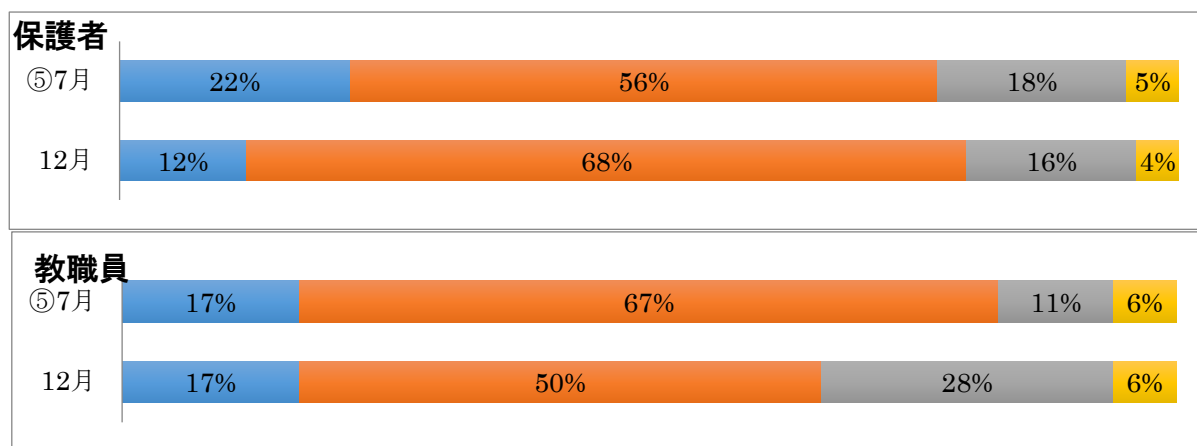


校内美化である「そうじ」の設問に対しては、児童の肯定的な回答は、７月１２月ともに８６％である。保護者は、およそ７割である。教職員は、７月の８９％に対し１２月は７８％となっている。

今年度から、縦割りグループでの掃除に取り組んでいる。異学年のグループで、高学年が低学年に掃除の仕方を教えながら主体的に取り組んでいる。２学期になるとグループの仲もよくなり会話も増えてきた。その反面、掃除に対する姿勢に課題が見えてきている。今後は、教師が縦割り掃除の指導や声かけを工夫していく必要がある。児童は、忍海小学校の学び舎に愛着をもって学校の美化に励んでいる。今年度からスタートした縦割り掃除を軌道に乗せるためにも子ども達が達成感を持ち、やりがいを感じる縦割り清掃活動にしていく必要がある。

【設問５】 「きまりや約束を守る規範意識」について

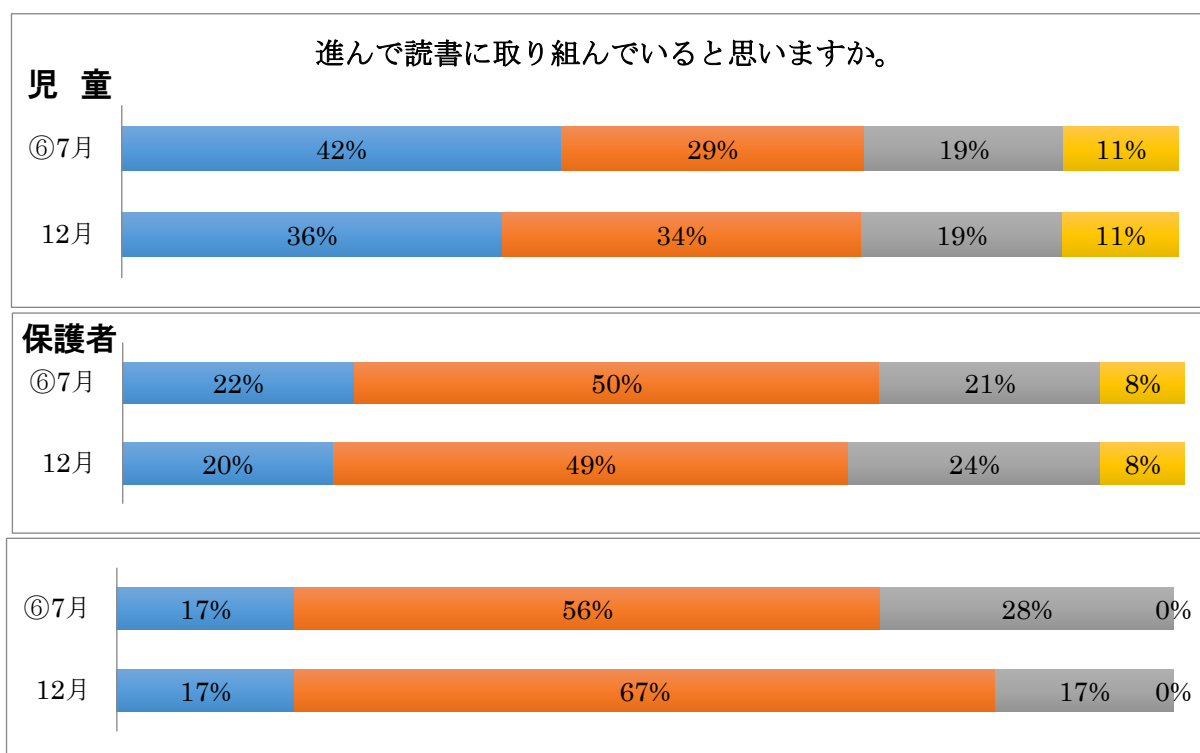




きまりを守る規範意識に関して、児童の肯定的評価は、7月の87%に対し12月は84%で、保護者は78%から12月の80%と大きな変化は見られない。また、教職員の肯定的評価は、昨年度の56%から、7月が84%と28ポイントも増加したが12月は67%と17ポイント減少している。保護者・教職員が、しっかりときまりや約束を守れず規範意識が低いと感じていることの要因を考えてみた。「守っているか」の判断基準の違いや守らせたい事柄が多いことも一因と考えられる。

学校生活において「廊下は右側を静かに歩く」「チャイムを守り行動する」「忘れ物をしない」「タブレット端末を正しく使用する」等、児童にとって守るべき項目は多岐に渡る。全ての約束を守れることを子ども達に求めるのは難しい。今後規範意識を持ちながら社会生活を送る下地を培っていくことを忘れてはいけない。集団生活・社会生活の中で約束・マナーがあることを日々意識させ、実践させていくことが、規範意識を高めることの基礎・基本となる。児童の心にどの場面でも高い規範意識が育つよう、そして学校生活のみならず家庭・地域での生活においても実践できるよう、今後も家庭と連携しながら心の育成に努めなければならない。

【設問6】 「自ら進んでする読書」について

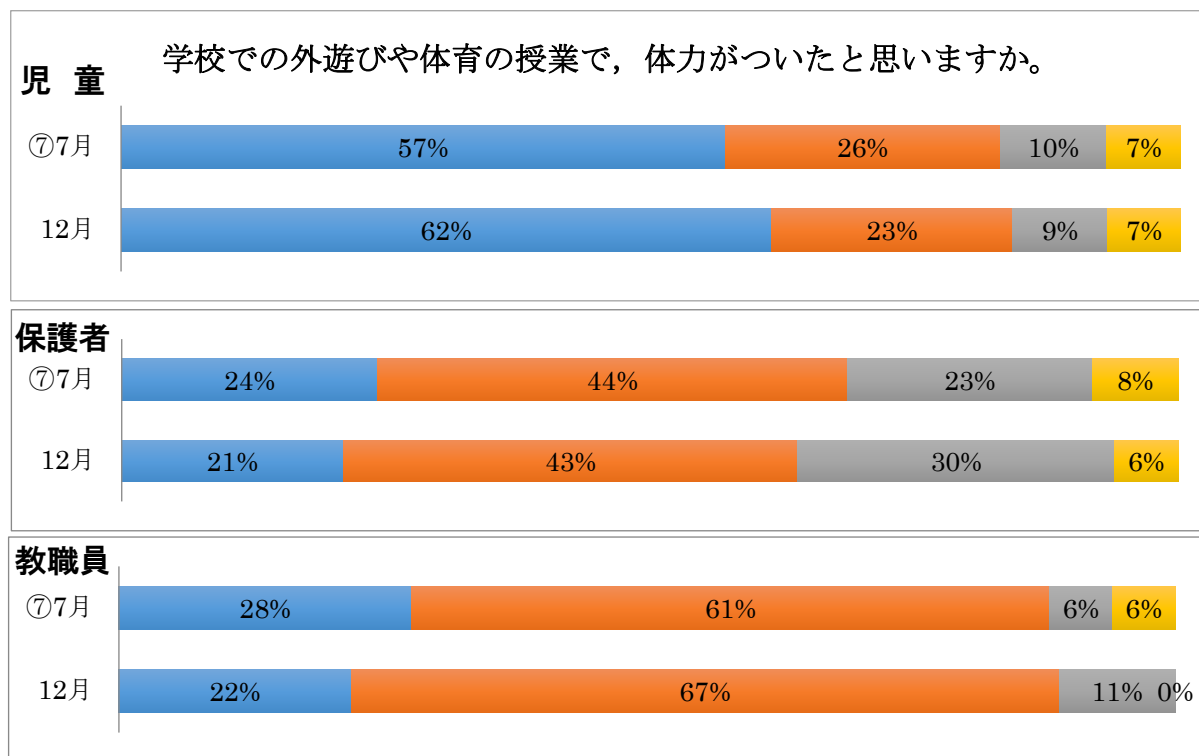


読書を楽しむ心の滋養も本校の重点課題の一つである。児童と保護者の肯定的な回答は、およそ7割であった。一方、教職員の肯定的な回答は、7月は73%で12月が84%と11ポイント増加している。1学期の振り返りから、休憩時間など図書室利用について機会を増やすように取り組んだこ

とがポイントの増加に反映している。しかし、児童の「そう思う」の割合は減少している。教職員が取り組んだことが、子ども達の読書活動の向上に必ずしもつながっていないところに課題がある。

子ども達は、朝の読書や読書の時間等でも熱心に本を読む姿が見られ、数多くの児童が読書に親しんでおり、児童の様子を見ても読書は好きである。読書環境を整え子ども目線で児童の本への関心や意欲が増すよう様々な手立てを行い本に親しみ楽しむことができるようにしていきたい。

【設問 7】 「遊びや授業を通じての体力強化」について



体力がついたと肯定的に答えた児童は、7月は83%、12月は85%で、教職員は共に89%である。一方、保護者は68%、64%となっており、学校と保護者との間で差が大きくなっている。

制限がなくなり、体育の授業や持久走大会、また体育委員会が学年ごとに行った休み時間の体力アップの取組など以前のように実施できた。児童・教職員の肯定的な回答が増えた理由と考えられる。体力強化だけではないが、学校での取組や子ども達の様子を家庭へ発信していくことも大切にしていかなければならない。また、体育の授業でも一人一人の運動量を確保するなどより一層体力向上に向けた授業内容を工夫していく必要がある。クラス遊びなど、休み時間により多くの児童が体を動かせるような取組も計画していかなければならない。

今年度から、学期末に学校評価アンケートを実施し1学期と2学期の分析を行うことができた。総じて肯定的な評価は大きく増減している項目は少ない。しかし、肯定的な評価の中身でいうと「そう思う」から「ややそう思う」へ子ども達の回答が移っている項目がほとんどであった。

要因として、1学期は進級して新たなスタートをして「頑張った」という気持ちが強かったものの2学期はクラスにも慣れ、1学期に比べて気の緩みが出てしまったと感じていたということが考えられる。

2学期は子ども達にとって、達成感や頑張った感を感じる機会が少なく、めあてや目標を示してはいたが、その後の価値付けや評価が不十分だったことも考えられる。3学期は、学年のまとめ・4月からの次のステージへの準備の大切な3ヶ月となる。2回のアンケート結果分析を生かして、めあてを具体的に示しながら、子ども達の評価・価値付けにつながるような振り返りに力を入れる必要があると考える。

また、児童と保護者・教職員の肯定的な回答が相反している項目があることも気になる。子ども達にどのような力をつけたいのか、その結果どのような力がついたのかを大切にしなければならない。我々教職員が「教えた」ではなく、子ども達の「わかった」を大切にしなければならない。学校としても、

このアンケートの結果を真摯に受け止め、教職員一同で共有し、今後の学校運営に生かしていきたい。
そして、本校児童の健全な育成に向け、常に向上心をもって取組を進めていきたい。